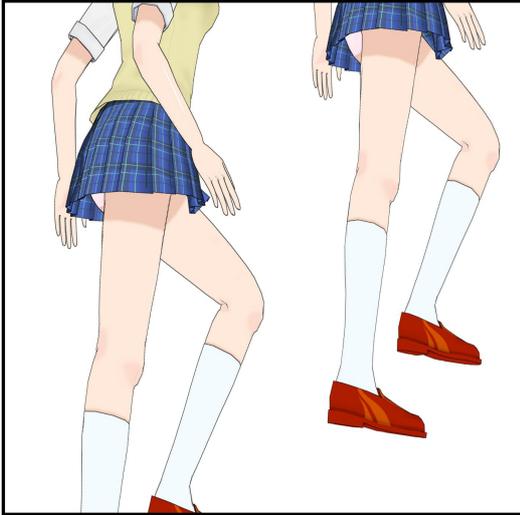


階段下は拷問室！



玉子王子 著

一章 覗きをとらえた少女たち。お仕置きは、治るんだからガチ玉潰し

二〇少しの特に特徴のない男、島田が電車から降りる。

いい場所がある。

一部で噂になっている駅。

近くの女子校の生徒が乗り降りする駅。

島田のように女っ気のない人生をおくる男にとっては、通りがかるだけで活力がもらえる気がする。

——共学ならこうはいかない。クラスの男子と楽しそうに……なんて所見せられたら彼女もいない俺みたいな人間は胸糞わりいだけだ。

しかし女子校なので、当然女子ばかり。

カンカンと、足音も高く鉄の階段を上っていく。

コンクリートではない。

簡素な鉄製の階段。

上って路線の上を通り、反対側に降りるとそちらが出入り口が女子校側なのだ。

島田は階段の下に入り、上を見る。

「おほ、見える見える」

階段を上る人々が見える。

スカートの女子校生らが通れば、当然パンツが見える。太ももが見える。

それほどはっきりとは見えないが、ある程度見れるし、相手からはわからないので凝視できるのもおいしい。

——単に絵として、女が見たいだけならAVだのなんだののほうがいい。覗きの醍醐味はやっぱり、自分が自分だけの光景を見てる特別観だよな。はっきりくっきり見えないが、俺が今、俺だけがこれを見てるってことだ。ここだと相手からは絶対見えないから、じっくり見て見づらさを補えるのもいい。どうせなら画質がいいに越したことはないんだし。ほんと、ここはいい場所だ。

噂を聞いて、島田がここにきてすでに一月。

最多で一〇人位、同じ覗きがずらりと並び、写真を撮ったり一度一会とただ見上げたりと様々だった。

しかし不思議と、今日は一人だ。

というか、初めごろの一〇人を頂点として、減る一方だ。

実は、覗きに気づいた女子校生らがひそかに待ち伏せ、一人二人と覗きをさらって女特有の遠慮のなさで金的集中攻撃、みっちりお仕置きしているのだ。

そんな目に合えば、また同じ場所で覗こうという人間は現れない。

ちなみに、この世界はナノテクノロジーが発達し、辜丸程度なら一〇秒で治せる薬がコンビニで買える。

そのため、辜丸を持たない女たちは理由さえあれば文字通り、言葉通りに**辜丸を潰す**。自分が辜丸を持たず、仕返して潰される可能性がゼロだけに、まったく遠慮なく潰しに来る。

島田の前から消えていった同志たちも、一人につき最低五〇回程度は去勢される地獄を味わっていた。

新入りでも、運悪く女子校生らにさらわれて初日でお仕置きという悲劇に見舞われる場合もある。それでは人数が増えていくわけがない。

——普通増えそうなもんだけど……どうなってんだ？

事情を知らない島田は思いつつも、上を見上げる。

両隣は死角だ。

左手側は線路、そちらには建物があって見えない

右手側は外で、ブロック塀がある。

前は階段、後ろは別の建物。

周りを囲まれ、安心して見上げられる形だ。

周りからは見えない。

とはいえ、封鎖された場所でもない。

島田ら覗きが入れるのだから、当然誰でも入れる。

階段横から直接入ると人目につくので、覗きたちは線路横の建物の前を通り、後ろの建物——トイレ——にいったん入り、さりげなく出てトイレの裏を通り、階段下に潜り込んでいく。

そのトイレ横で、さりげなく立っていた女子校生二人。

彼女らは見張りだった。

片方、巨乳の少女。

「また入ったよ」

「うふふ、もう私、ちょっとこれ楽しんでるんだ」

「あは、実は私も面白いと思ってる。はぐっ、とか、覗き野郎の反応面白過ぎるもんね」

へこ、と腰を引き、股間を押さえる少女。

目を見開き、口をしゃちほこのようにする。

「あは、それぞれ！ あがっ！ とか言ってさあ……」

「かるーく、ここ蹴ってやるだけで男ってもう一発だもんね。いっつも威張ってる男がへこってなる姿見ると、マジスカッとするよ。覗き野郎だと思いとさらにね」

パンパンと股間を叩く。女ならではの遠慮のなさ。軽く叩いているだけだが、その「軽く」も男なら自ら叩くのは一生無理な強撃である。

トイレに行こうとしていたサラリーマン風の若い男がギョッとなる。

気づき、目を見張る女子校生二人。

ぷっ、と噴き出す。

「気にしないでください」

「そうそう、私たちなら大丈夫です。ねー」

「ねー、あは。だって私たちには……付いてないもんね、これ」

指でボールを作ってみせる。

顔を赤くして、トイレに駆け込む男。

笑いつつ、仲間に連絡する女子校生二人。

階段はこちらだけではない、いったん階段を昇って反対側に行った女子校生の中で、彼女らの仲間たちがもう一つの階段を通して秘かに戻る。

そして、いつも通り、覗き空間に入っていく。

数人は、現行犯を作るために階段を通る。

「うほ。ピンクのおパンツ」

見上げ、自分だけの光景をスマホで撮影。

見紛うことなき現行犯。

女子校生らが肩をすくめる。

数人がスマホで覗きの姿を撮影。

それから、一人がずっと近づく。

気配を消しているが、普通に歩き寄っても島田は気づかないかもしれない。

——必死過ぎる。ひくわー。そういう腐れおキンキンは……

掌でカップを作る。

男の玉を包み込み、衝撃を逃がさない金カップ。

「カップ出た出た」

「ぷふ、とても攻撃する手つきじゃねー」

「でも男には必殺というね」



小声で笑いあう仲間たち。

満面の笑みで、巨乳少女がペンと島田の股間を下から叩く。

「はぐっ！」

「え、そんな軽く？」

「アレで効くのよ、見てて」

はじめてお仕置に加わった数人が奇襲のチャンスを棒に振るような軽い打撃に驚く。

が、残りの二〇人ほどはニヤニヤ。

顔を引きつらせる島田。目元を震わせ、横に急に現れて金的をかましてきた少女を見る。

「ちょ、な……おおおおお」

腰を引く。股間を押さえ、スマホを取り落とす。

「く、く、おおおおお」

軽すぎるカップ打ちだが、場所が場所である、男特有の苦痛に顔を歪める。

始めの痛みも驚くほどの物だが、軽い金的はむしろじんわりと後から痛みが広がり、尾を引き大きく感じる。

股間を押さえ、グネグネと腰を振る。

「ぐぐ、ちょおおおおお、た、たまああああ何をおおお」

悲惨の一言の島田。

それを指さす少女たち。唾を飛ばして笑う。

「見てみて！」

「スッゲー苦しんでる！」

「ウツソ、今ので？ どう見ても超軽かったのに！」

「弱すぎ！ ゴールドボール弱すぎ！」

「ちょ、お前ら何……」

「見てみて、お尻振ってる！」

「踊ってる踊ってる！ 見てみて、これがキ〇タマダンス！」



急所痛特有の腰の動きは女子から見ると意味不明もいいところのようだった。手を叩き、唾を飛ばして爆笑する。

「な、な」

顔を赤らめる島田。

前で、巨乳の少女が笑う。

「あは、キ○タマ痛い? 私のカップ痛かった? かなーり加減したんだけどなあ? だって本気でやったら一発で転がっちゃって面白くないもん。キ○タマって弱すぎるから」

「お、お前、なんでこんな」

「なんでって、覗いてたからだよ。パンツをよ」

「の、のぞいてねえよ。お前らこんなことして……」

「あは、やだー、女の子にキ○タマやられて腰引いちやって、その状態で凄めるんだ?」

「ユウコ気を付けて! 仕返ししてくるよ! 同じことしてくるよ!」

「え、ヤダ、急所攻撃? こわーい、防御しないと!」

さっ、と股間を庇うユウコ。

ニヤニヤと島田を見る。

「睾丸守らなきゃ、コーガン。タマタマ防御だ!」

「あは、何言ってるのユウコ! そんな必要ないじゃん」

「えー、でも急所だよ？」

「あはは、必要ないよ。だって私たち女の子には……」

ニヤニヤと、その場の女子のほとんどが腰を突き出す。

「タマタマなんてないもん」

膝を開き、腰に手をやる。無防備に突き出される股間。

「ふぐ」

——な、こ、こいつら……万一そこを攻撃されても、全然痛手にならない、男に比べて圧倒的に優位にあることを見せつけて、見下してるつもりか……ざけんな、玉無しが男より上のわけねえだろ。出来損ないだよ玉無しクソマ○コなんて。マ○コパワーで人生イージーゲームの**禁治産者**らしい勘違いだぜ。

心の中でだけ自由を満喫する島田。

なんとなく気配を察する少女たち。

顔を見合わせる。

「んー、なんかこいつとんでもないこと考えてる顔してね？」

「あー、確かに女性蔑視発言おもっくそ頭の中でしてそう」

「し、してねーよ！ あ、ちょ」

ニヤニヤしながら、少女らが群がり、腕を引っ張る。疑いは正しかったが、少女らに確証はないはずだ。

という事は、別に疑いが間違っていた場合でも、結果は同じという事ではないか。

ようは、**覗き野郎に因縁をつけて更なる金的に進む**というだけの話。

当然抵抗する島田だが、金的で弱っている上に腕一本に三人掛かりなのでどうにもならない。

腕を左右に引っ張られる。

無防備にされる股間。いや、一様膝を締め、腰を引いてはいる。

「あ、あ、ちょ、ちょっと……あはは、やめようよもう……」

卑屈に笑うしかない。

——男同士ならまだ、玉ばかりってことはないだろうけど、相手は女だ、なにするかわかんねえ。というか、すでに玉やられてるし……目！ こいつらの、目、ちらちら俺の股間ばかり見てんだよ！ 攻撃も絶対玉狙ってくる、狙い撃ちにしてくる！ 何とか誤魔化さねえと！

「何か誤解があるんじゃないかなあ」

「まあ、なんだろうが、覗き野郎には、お仕置きなんですけどね。お股に念入りに」

「もうやめ……はふっ！」

「はいキーン！」

ペン、とまとも軽い金カップ。

軽いが、人体最弱部を狙われては大打撃を受けざるを得ない。

腰を引き、手をつかまれているので抑えることもできずに悶える島田を見て、嘔き出す少女たち。

「ぎゃははは！ もうやめろ、とか言いそうだったけど「もう」っていうほどまだなんもやってないよねえ」

「ほふおおおおお」

「ほんとに痛いんですか？ あんなに軽くやってるのに。私なら全然平気というより触られてるだけでしょあんなの」

「女なら平気、男なら耐えられない、金の玉があるから耐えられない、そのギリギリを突いてるのよ。慣れればできるようになるよ」

「これできるようになったら、男の弱さと女の強さがはっきり実感できて楽しいよ」

「力抜けてきました」

「正直金的の後とは思えないぐらい力あったんだけど、さすがに二回目食らったらねえ、抜けてきちゃって」

「股間狙われると男って脆いねー」

「私たちならまだ別にダメージって話じゃなくね？」

「撫でられてるだけだよ、あんなの」

「よわーいよわい、キ○タマ弱い、男のお股は弱すぎるー、はぐっ！」

指でボール二つを作り、股間の前にあてて見せる少女。嘲笑し、最後は股間を引いて痛がる男の真似。

「こんな弱点さえなきゃ、男の人の力には勝てるわけないのにね」

「振り払って逃げてるでしょ、私たちなんか」

「でも、タマタマ付いてるおかげで、私たちでも楽勝」

「ひ、卑怯だぞこんな人数で」

「あ、卑怯だって」

「へー、それじゃ卑怯ついでにみんなで金的ばかり蹴ってあげようか？ 金的、キンテキ、きんて一き、だけ！ 集中攻撃しちゃうよー？ いたいいたーい、おキ・○・タ・マ」

「タマタマ再生薬はいっぱい用意してるからね。私たち女の子は弱いんだから、強い男の人相手に遠慮なんかしないよ？ 潰すよ？ キ○タマ潰すよ？ 二個とも潰すよ？ 潰して再生して、また潰すよ？ 何度も何度も、意識完全になくなるまで覗き野郎のキ○タマ潰すよ？ 潰し続けるよ？」

「ちょ、やめ……はふっ！」

「はいキンテーキ」

ぐにゅ、と金パンチ。膝を締めている島田だが、前からのカップやパンチを防ぐ力はほとんどない。

「あ、あ、あ……おおおお」

汗が噴き出す。目が回り始める。腹膜が引き締まり、内臓を締め付ける。

腹膜は睾丸も包んでおり、そこを攻撃されると全体が収縮するらしいが、そんなことを考える余裕は島田にはない。

当然、肉袋も引き締まり、余計に睾丸を締め付けてダメージすら与える。

「ほごおおお、き、キ○タマああああ」

「あは、痛そう！」

「耐えてる耐えてる！ 男だけの痛みに耐えてる！」

「我慢なさい！ チン○ン付いてるんでしょ！」

「むしろその下にぶら下がってる物のせいで苦しいんだろうけどねー」

「あー、よかった！ 私付いてなくてよかった！」

「だよ、女の子最高！」

「ふぐううう、な、何が」

「ん、なんか文句でも？」

「女の子の攻撃三回でその様でよく……」

「ふおおお！」

「きゃっ！」

足。

足は一樣自由だった。それを前に立つユウコに向けて振り上げる。ボス、と股間に爪先がめり込む。

「あっ！」

蹴った島田が青ざめる。

——ヤベえ、あんなどころ蹴ったら余計切れられる！ 腹狙ったのに、足が上がり切らなかった！ ヤベえよ、ヤベえよ……

震える。

股間を押さえるユウコ。痛そうに顔を歪める。が、すぐにふっと表情を緩める。痛みは去った。

痛みは去った、もう平気だ。

「うう、っと、痛いわねー。もう、こんなところ蹴るなんて……っていうか、私の三発より今の一発のほうが力入ってるよ」

「大丈夫？」

「え、何が？」

「あは、大丈夫に決まってるか」

「女の子だもんね」

「男の子だったら大変だろうね」

「転げまわってるよ、今のは」

「男の子だったら、女の子になってるよ、今のは」

「ぎゃははは！ 玉無し系男子！」

「ま、別にもう痛くもなんともないけど、一樣仕返ししちゃおう。お股蹴りにはお股蹴りで応じるべきだよね」

「ひっ」

「あは、股閉じてまあ」

「女の子みたいよ」

「誰か、片足持ち上げて」

「はいはい」

「ひいいっ！」

金的で弱った島田は、あっさり片足を抱え上げられる。

「えへ」

笑い、近づいてそっと股間を掌で包むユウコ。

「ひっ」

「がら空きだぞー、大事なお急所」

——お、結構でっかい。覗きやるような変態野郎はやっぱチ○ポもキ○タマ大きいんだ、きん

も一☆

「やめ、そこだけは……はううう」

「モミモミモミモミ、タマタマモミモミ。男の急所をも一みもみ」

「やっちゃえやっちゃえ、そのままキ〇タマ握り潰しちゃえ」

「可哀そうだよ、キ〇タマ潰されたら男の人生お終いなんだよ？ しゅーりょーなんだよ？」

「チ〇ポ縮んでる？ ビビってチ〇ポ縮んでる？」

「ねえ知ってる？ キ〇タマ潰すのに必要な握力って女の子の平均握力と同じだって話。神様がちゃんと女の子が握り潰せるようにキ〇タマの強度設定してくれたと思わない？」

「へー、そうなんだ。試してみよ。ぎゅー」

「ああああああ！ やめ、放してっ！ 潰れる、潰れるっ！」

腰をねじり、逃れようと足掻くがもちろん何の足しにもならない。

「ぎゃはは、必死必死！」

「潰れちゃうぞー、睾丸！」

「やめてええええ！」

「そんなすぐ潰れないって。そら、ぎゅー」

「きゃは、やっちゃえ！」

「潰れるぞ潰れるぞー！」

「二個とも握ってる？ 握ってるの？」

「苦しそう苦しそう！」

「超ビビってる！ 玉ぐらいいいじゃんねえ、握り潰されても」

「あごあおお！」

始めはのたうっていた島田だが、すぐに身動き取れずに体を硬直させるだけになる。

少しでも睾丸に加えられる圧迫に対抗しようとするが、いくら筋肉に力を込めても何の助けにもならない。

腕を押さえる少女らは力が戻ってきた感じに驚くが、腕一本三人なら何とでもなる。

棒立ちの島田の周りに、手の空いた少女らが詰めかける。

唇を噛み、声も出せない島田に耳元でささやく。

「キ〇タマ潰れろ、潰れちゃえー」

「ぎゃはは！ やだよおお、玉無しはやだおおおお」

「玉だけは許して、許してええ」

「潰すからな、キ〇タマ潰すからな」

「痛そー、苦しそー、女の子の力で握られてるだけなのにねー」

「ねえ想像して？ タマタマがない人生を。エッチもできない、チン〇ン役立たずで、小さい男の子が堂々立っておしっこしてる横で、タマタマがない袋を見られたくないから女の子みたいに個室で座っておしっこしてる自分を想像して？」

「切っちゃお切っちゃお、チン〇ンも切っちゃお。チョキンしちゃおう。楽になっちゃおうよ。タマタマ無くしてチン〇ンだけあっても仕方ないもんね」

「苦しい苦しいキ〇タマ握りー」

「タマタマ潰れたらもうこんな苦しい目に合わないでいいよ？ 楽じゃね？」

潰れても玉が治ることは少女らはもちろんはっきり理解している。だからこそ、笑いながら「潰れたら終わり」の話もできる。実際終わりなら、むしろ「潰れちゃったらヤバいからこの辺で」と止めに入る優しい子たちばかりだ。

しかし治るとなると**半笑いで潰しに来る**し「潰れたら終わりだねー」などと笑いながらからかいに来る。

——ダメだ、ダメだ、ガチで潰される、こいつら「治るからいいっしょ」の一言でマジで玉潰す。やっぱ女頭おかしいわ……玉、玉があっあっあっあっあっあっあっあっ。

もはや声を上げる余裕もなく、頭の中で絶叫する島田。

体験版終わり

この後、報いの玉潰しが続きます。

土下座で自虐言葉責めにより一時的に許されるも、反省していないところを見られて結局は去勢祭りに。

続きは製品版でぜひお楽しみください。